

「都市伝説X 紹介文」

岡和田晃

日本SF作家クラブ会員の平田真夫さんが、〈山野浩一未収録小説集〉に収めた「四百字のX」シリーズへの返歌を書いてくださいました。

題して、「都市伝説X」。なにはさておき、まずは本文を読んでみてください。

……読みました？ いかがだったでしょうか？

「四百字のX」のなかでも、とりわけ「箱の中のX」に通じる書き方になっていると思います。

「箱の中のX」は、入れ子構造、チャイニーズ・ボックスのジレンマを連想させる話で、何かを「X」と書くと、書いた時点でその「X」は——正体はわからないながらも、それ自体として——存在してしまう。その不思議さをうまく表現している作品でした。

山野さんの場合、この「X」には、明らかに実存主義的な問題意識が投影されています。実存主義といっても、サルトルやカミュの実存主義にとどまらず、ヤスパースやベルジャーエフの影響が強いようではありますが。

この「X」はまずもって、社会と対置される「個」の空隙を表しているようです。「箱の中のX」では会社に相当するものですね。これが「都市伝説X」では、街という全体にまで広げられる形で語られているようです。

そういえば、山野浩一さんには「都市は滅亡せず」（「流動」一九七三年一〇月号）という名作がありまして……。